

2012年10月30日発行

# 江戸遺跡研究会会報

No. 134

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

## 江戸遺跡研究会 第137回例会のご案内

日 時：2012年11月14日（水）19:00～

内 容：関根 信夫 氏（株式会社 四門）  
「新宿区信濃町南遺跡第4次調査の成果」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分  
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内・成瀬）03-5452-5103  
江戸遺跡研究会公式サイト <http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第136回例会は、2012年9月19日（水）午後7時より専修大学神田校舎7号館731教◇  
◇室にて行われ、宮田眞氏より以下の内容が報告されました。 ◇

## 東海道藤沢宿（No.78）第4地点・第6地点の調査

宮田 眞

（株式会社 博通）

### ○第4地点

所在地 藤沢市藤沢二丁目 1870 番 1 他地点

調査期間 平成 19 年 10 月 15 日～平成 20 年 2 月 9 日

調査面積 1007 m<sup>2</sup>

### ○第6地点

所在地 藤沢市藤沢二丁目 1878 番他

調査期間 平成 20 年 10 月 28 日～平成 21 年 1 月 28 日

調査面積 969 m<sup>2</sup>

#### 1. 遺跡の立地と歴史背景

本調査地（第 4・第 6 地点）は神奈川県藤沢市二丁目に所在し、東海道藤沢宿（藤沢市No. 78）遺跡の範囲内に位置する。小田急藤沢本町駅の東方約 350 m、JR 東海道線藤沢駅を起点にすると北北西約 1.2k m の距離で、主要地方道藤沢・厚木線（旧東海道）が南に通る。また調査地は地勢的に見ると藤沢の中心部を形成する平野の中央北よりに位置しており、境川と引地川とに挟まれた地域に当たる。境川は調査地の東方約 400 m、引地川は西方約 1.5k m の距離にある。また調査地の北約 180 m には境川の支流白幡川がある。調査地の北側一帯はかつてこの白幡川の氾濫原だったようだ。白幡川北岸近くには白幡神社がある。

##### （1）藤沢宿と藤沢御殿

藤沢御殿は、徳川家康の手によって慶長頃に建設された。慶長五（1600）年に家康は藤沢に止宿し鎌倉に赴いていることから、これ以前に御殿があったと考えられる。また慶長元（1596）年に同じく家康によって中原往還の宿の一つとして、中原（現平塚市）に御殿が建てられていることから、藤沢御殿もこれに近い時期に建設されたと推考されよう。藤沢御殿跡地は調査地の東方約 350 m、境川の手前の西岸地域で現在藤沢公民館・藤沢市福祉会館の辺りである。

徳川家康は関ヶ原の戦い以後間もなく幕府の諸制度の整備を実施しており、その内、戦国大名の伝馬制度を基礎にした交通網の整備も重要な事項の一つで、慶長六（1601）年まず五街道の一つ東海道に宿を定め、藤沢宿を始めとする各宿には三十六疋の馬の常置が義務付けられた。その後、参勤交代制成立に伴って伝馬 50 匹増の 100 匹の常置が義務付けられ、人足は 50 人と定められた。さらに享保十（1752）年には人足負担が 50 人増員され合計 100 人になっている。

## (2) 藤沢宿と罹災

藤沢宿は江戸後期から明治にかけて（寛政 9 年～明治 19 年）12 回の大火に見舞われている。今回の調査においても火災によると考えられる焦土面が 2 時期以上、旧東海道に近い調査区の南部付近で検出された。上記の大火の内、本調査地付近を類焼したものでは、慶応 4 年 3 月 13 日台町大火と明治 13 年 11 月 27 日の火災（大川屋火事）が挙げられる。

## (3) 調査地付近の近世・近代の様相

さて第 4 地点付近の近世・近代の様相については、文久 3 年（1863）の町割り図が残る。それによると当該地は、「田むらや安兵衛」となっている。田むらや安兵衛は戦前頃まで呉服を商っていたとのことで、俗に「田安（たやす）」と呼称されていたようである。

## 2. 調査概要

### (1) 第 4 地点

本調査地は南北に長く、現地表レベルは南端部（旧東海道側）が海拔 10.5 m 前後、北端部が海拔 9.7～9.9 m で調査区中央部を境に北側が一段低くなる。遺構面は大きく分けて 2 面（南側は 4 時期）が確認され、江戸中期（宝永以降）～後期、近代（明治～大正・戦前）の遺構群が検出された。検出遺構は、建物 21 棟、石組遺構 6 ヶ所、石敷（石畳）2 ヶ所、井戸址 8 基、溝址 1 条、土坑 84 基、方形土坑 4 基、埋甕 4 基、モルタルによる枡（水槽か？）1 他である。

出土遺物は棧瓦（鉛瓦）、近世・近代の陶磁器類、かわらけ、瓦管（土管）、金属製品、漆器、木製品（荷札等木簡類を含む）、セルロイド製品等合計で遺物収納箱に 110 箱を数える。

今回の検出遺構で特に注目されるのは、石蔵建築の基礎遺構で蟻燭地業と言われるものである。これは建物（蔵）の四周に沿う形でトレンチ状の穴を掘り廻し、その中に角柱状の鎌倉石切り石（蟻燭石）を等間隔に並べ、さらにその周囲を土丹・凝灰岩・栗石等で埋め堅固につき固めたもので、言わばビル建築の基礎のような物である。蟻燭地業の下層にはさらに松材の横木（筏）や松杭による、沈降防止の施工がなされていた。今回は、この様式あるいはその発展系と考えられる建物が合計で 8 棟見つかり、これらは一つの敷地と見なされるエリア内の西側に南北に並ぶ形で配されていた。蔵の東側には母屋建築と考えられる建物の基礎遺構も見つかっている。

井戸は主に枡材にモルタルを用いているが、井戸枡周囲を掘り下げたところ内 1 基にはモルタル枡の外側に木製の樽枡が残っており、元来は樽枡の井戸であったことが判明した。

調査区を南北に大きく区画する溝 1 が、調査区のちょうど中央部を東西に貫通する。溝 1 の覆土最上層からはプラスチック製の工事標識の破片が出土しており、溝 1 が比較的最近まで地表に露出していたことが確認できる。しかしこの溝は明治期の地勢図中に描かれており、その起源は近世に遡る可能性も否定できない。この図によるとこの溝の東側延長部は、妙善寺の西縁を通過して白幡川方面へ北上することがわかる。

### (2) 第 6 地点

調査の結果 3 時期の遺構面が検出された。

#### ①第 1 面

第 1 面は海拔 8.8 m 前後で検出された。第 1 面からは母屋建物数棟、掘立柱建物（付属舎）1 棟、柱穴列 1 列、石列 5 列、基礎遺構、石樋 2 筋、井戸 2 基、土坑 22 基、が検出された。

母屋建物に関しては礎石下の地固めの並びが見つかったもので、土丹・鎌倉石・栗石等を使った地固めである。掘立柱建物はおよそ 3.5 m 四方と小型で、柱間も 65c m 間隔と小さいことから、物置小屋のような建物が想定される。井戸 1 は鎌倉石切り石を平面円形に組んだもの、井戸 2 はモルタルの円形の枠で、何れも近年まで地表に露出していたものと考えられる。石樋は鎌倉石製で雨落ち等排水の施設であろう。検出土坑は明らかに第 2 次世界大戦以前の物を対象とした。第 1 面の遺構群の年代は関東大震災以降と考えられる。

## ②第 2 面

第 2 面は現地表下 1 ～ 1.2 m（海拔 8.7 m）前後で検出された。第 2 面は調査区南部のみに遺存しており、遺構は石列 1 列、井戸 1 基を含むが遺構の中心は土坑群で合計 10 基が検出された。土坑は多くが平面方形をしており中には一辺が 5 m 以上の大型な物が複数数えられる。これら大型の土坑からは樽の部材等を始めとした大量の遺物が出土しており、その量の多さから何軒かの共同の芥穴（廃棄施設）であったことが推察される。これら芥穴からは生活廃棄物の他に、荷札を始めとした近世（近代も含まれるか）木簡が多量に出土している。

## ③第 3 面（最終面）

第 3 面は現地表下 130 ～ 180c m（海拔 8 m）前後で検出された。遺構は通路遺構 7 条、溝 1 条、橋 1 箇所、井戸 3 基、土坑 1 基、竹組み遺構 1、方形木組み遺構 3 基を検出した。

通路遺構は幅員約 2 ～ 4 m を測り、調査区内を東西南北方向縦横に走っており、調査区中央を東西に貫通する水路 1 を橋によって渡っていた。通路の構造は角材と杭で両側の土留めを施し、その中間に大量の木材を芯に入れたもので、建築材等の廃材を中心にして、樽の部材や樹木の枝あるいは家財の破片等に至る身の回りにある全てのものを利用している。これはこの地域が砂丘背後の湿地帯で地盤が悪かったため、平易に通行するために木材を活用した一種の舗装道路と言うことができよう。この通路遺構は第 3 面で確認されたが検出部分は通路の基部で、道自体は第 2 面期に使用されたものである。

水路遺構は幅がおよそ 2.5 m、深さが 1.5 m 前後を測り、基本的に杭を打ち込んで護岸を形成している。上述したように調査区を東西に貫通しており、橋が 1 箇所南北に架かる。また北岸の一角に方形をした張り出しが設けられており、船着場だった可能性も考えられる。調査地の北側は現在開発が進みショッピングモールとなっているが、その敷地内にはかつて境川の支流白幡川に続く水路が流れていたとの事で、境川からの舟運が着岸した港とも考えられる。南側の街道沿いの表店で商う物資のための運河的性格を想定することができそうである。

井戸址は 3・6 が樽による枠、5 は枠材の遺存は無かった。

## 3. まとめ

### (1) 第 4 地点

以上調査の成果を概観したが、遺跡の詳細については報告書に委ねたい。調査の成果から一瞥して述べるなら、藤沢宿の起源は慶長期頃（1600 年前後）まで遡ることができるが、本調査地付近では本格的な町屋の成立は 18 世紀以後と考えられる。その根拠は今回の最終面（地山面）からは、宝永四年（1707）の富士山大噴火

の際に降り積もった所謂「宝永火山灰」を廃棄した土坑（ごみ穴）が複数検出されたが、建物址や生活芥を包蔵する土坑等の検出が一切無かったことである。

その他に本調査地点からは上記した「田安」の紙製商品ラベルや判子、店章を意匠した軒瓦、店章入りのオリジナル湯飲み茶碗、和舟のミニチュア製品、荷札木簡等が多く出土しており、まさしく田安の旧跡であることを物語っている。

## （2）第6地点

今回江戸後期から明治期にかけての第2面・第3面においては住宅や店などの建築遺構の検出は皆無であった。それに対して水路、通路、大型の芥廃棄土坑等が調査区全域に亘って見つかっている。検出状況から今回の調査区の範囲内においては、地域で共用した公的な性格の強い場と考えたほうが妥当なようである。しかしそういった芥穴の中には、廃棄された荷札木簡等の出土遺物から、土坑42・44・井戸5は伏見屋、土坑41・43・60・竹組遺構は煙草屋といったような、各人（家）専用と考えられるものが確認できた。

さらに出土木簡から、藤沢宿が地域経済において大きな位置を占めていた事の一端が明らかになった。

その一つは、藤沢周辺の生産者から藤沢宿の煙草屋茂兵衛宛に水油を送りつけた際の荷札で今回複数出土している。水油はゴマや菜種から抽出された植物性の油で灯火に使われた。この記載内容に横浜開港資料館の西川武臣氏が大きな発見をされた。それは氏が過去に調査された横浜市金沢区の旧家「松本家」に伝わる江戸後期の古文書の中に、藤沢宿の煙草屋茂兵衛が同家へ水油を発送した旨の内容が記載された送付状が含まれていたことである。荷札木簡の受取人の煙草屋茂兵衛と、松本家に水油を販売し送りつけた煙草屋茂兵衛は間違いなく同一人物であろう。遺跡から発見された考古資料と、遠隔地に残されていた古文書の内容が符号したことは、極めて稀有なことで奇跡としか言いようがないだろう。また藤沢宿の商人の商業活動が想像を超えて広域で精力的であったことが証明された。

さらに出土木簡の中に興味深い資料がある、それは鶴見大学の松吉大樹氏が指摘された第3面通路遺構出土の墨書木札で、一方の面に「證文当板」の墨書が大きく書かれ、その下方に「扇谷会所」の四角い焼印が押されており、もう一方の面には上4行、下3行の墨書が上下二段に記されている。この木札に焼印されている扇谷会所とは鎌倉市扇が谷に現在も所在する浄土宗寺院（東光山英勝寺）のことである。英勝寺は寛永一三年徳川家康の菩提を弔うために英勝院が開創した人である。英勝院は徳川家康の側室（お勝の方）になった女性で、水戸徳川家の始祖徳川頼房の准母である。従って英勝寺の住持には江戸時代を通して水戸徳川家に関係する女性が入っており、水戸徳川家から手厚い庇護を受けている。しかし英勝寺はその来歴の高さゆえに一般の檀家を持たなかったためもあってか、経済状態は決して安泰ではなかったようだ。そのため徳川家光から祠堂修繕のために贈与された三千両を元金として、文化十一年（1814）祠堂金貸付所を設けることになった。これを（水戸様御貸付所）あるいは「扇谷会所」などと称した。藤沢宿を始め藤沢市域ではこの貸付金がかかり浸透していたようで、藤沢市羽鳥の三贅家は幕末期に、英勝寺や地元の遊行寺の祠堂金貸付業務を請け負っている。その他にも藤沢宿周辺の有力な町民・農民達から、祠堂金の名義をもって預金を仰ぎ貸付金の増資を図っており、その預金に対する預かり證文が残っている。

このように藤沢宿が思わぬ方面への交易や、広域な金融活動に深くかかわっていたことが調査成果の中から理解できた。今後さらなる成果に期待する。



図1 3面全景（上が北）



図2 3面水路1（北西から）



図3 3面通路3（西から）

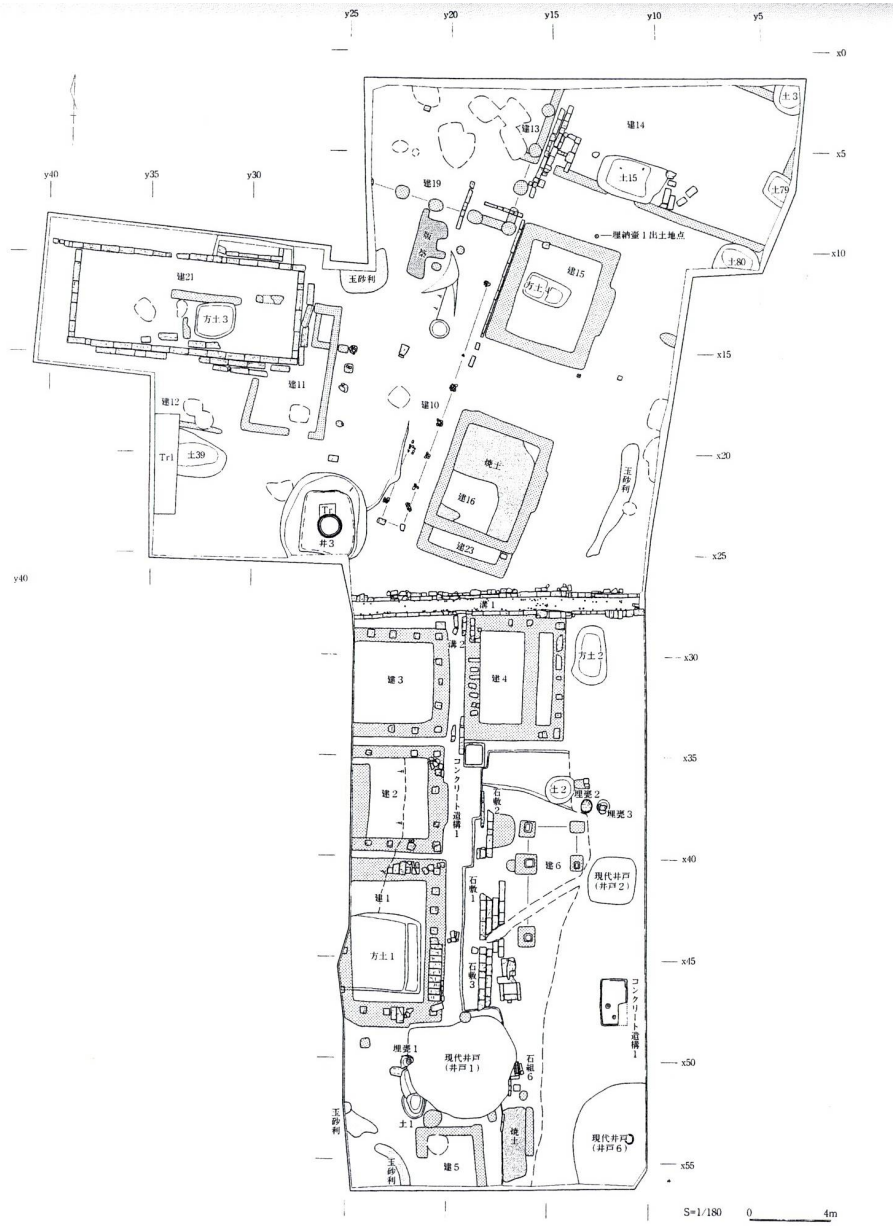


图4 第4地点 1面遺構配置图

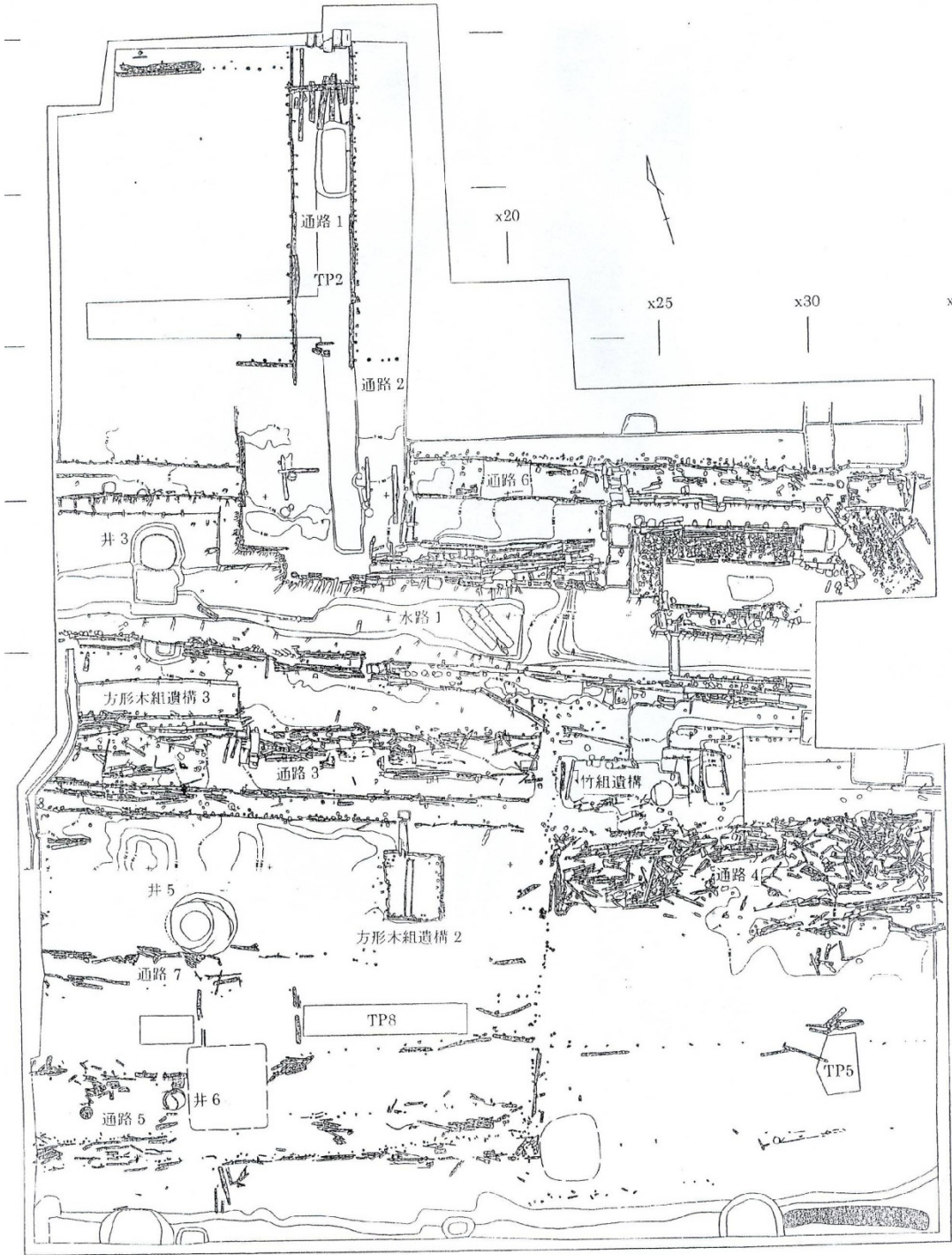


图5 第6地点 最終面遺構配置图